



東京南品川宿五百蒸気船水支甲申市五島ハ明治七年二月より

女房を置去り家出しく丸年と四月あちう季さた  
船の經切り暮ふ尽て女房のあちこの同職何某と  
心ふ添やね親しみよよくく凌ぶくさるこしお

今五年五月の赤の頃おとい近くへ

廻戻り家の様子を委し

お焼つけもせぬ乳の石炭

我々の炎を倍まうて裏う

胸の早車張さく筒先肉入

女房が首筋引おんそ

ろお弟赤と礼らや

いふ口へ

せ火箸ををちてあちうこ手足五條小押

當てる半死半生火宅の責苦非道

なご恋の鬼跡らちを事

くら

大新聞  
紙  
四十二号

新報  
後  
無

終  
局  
上  
政  
取

市  
恩  
治

文  
花  
堂  
誌

母と女房が應へ訴へ直  
市五島ハ召まられ味  
御吟味中つらと  
報知全頁全五号  
二出せり

